

# 家庭科における布を用いた製作の 自己評価活動の意義と展望

— 学習過程に着目した評価研究の検討をふまえて —

一 色 玲 子

(2009年10月6日受理)

A Study on Educational Significance and Vision of the Self-evaluation Activity  
in Hand Sewing Class in Home Economics Education  
— Review of evaluation research about learning process —

Reiko Isshiki

**Abstract:** The purpose of this paper is to examine the educational significance and vision of the self-evaluation activity on learning process in hand sewing class in home economics education. The review of evaluation research about learning process in hand sewing class showed that self-evaluation activity about making process was reflected for learners' individual changes. While, there were two subjects: self-evaluation ability was associated meaning to execute their learning activity as handicraft-learning, and to consider the evaluation object. There were three levels on the handicraft-learning, activity-act-operation according to the activity theory (A, N. Leontiev, 1975). The handicraft-learning activity was composed of production activity and self-evaluation activity, and of three stages: (A) plan and design, (B) making (cut, sewing, decoration), (C) work evaluation. To examine the evaluation object about self-evaluation activity on these stages, internal operations depended on external operations for each act. This framework suggested that the internal operation of self-evaluation activity was needed for teachers and learners for each evaluation.

Key words: self-evaluation, home economics education, hand sewing, internal operation  
キーワード：自己評価、家庭科教育、布を用いた製作、内的操作

## 1. 問題の所在および研究の目的

家庭科における布を用いた製作実習授業は、生活を創造する能力を育成するという教科目標達成の手段および、基礎的・基本的な技能を育む場であり、実践的・体験的学習活動の一つとして位置づいている。2008年

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：鈴木明子（主任指導教員）、平田道憲、  
角屋重樹、伊藤藤子

度に告示された小学校および中学校の学習指導要領では、その内容と取扱いについては、小学校家庭科の「C 快適な衣服と住まい (3) 生活に役立つ物の製作<sup>1)</sup>」、中学校技術・家庭科家庭分野「C 衣生活・住生活の自立 (3) 衣生活、住生活などの生活の工夫」の「ア 布を用いた物の製作、生活を豊かにするための工夫<sup>2)</sup>」に記述されている。

子どもたちの日常的なものづくりの機会が減少する中で、人間形成としてのものづくり学習の重要性が再評価されている（中央教育審議会, 2007）<sup>3)</sup>。そこでは、ものづくりの重要性を、緻密さへのこだわり、忍耐強

さ、ものの美しさを大切に感性などを育むものとしてとらえられている。家庭科には、調理や被服製作といったものづくり学習がある。その中で、布を用いた製作は、個別かつ長期的に素材や道具と対峙する活動特性をもっている。また、家庭科の学習指導要領においても「形などを工夫し布を用いて製作することを通して、布や生活に役立つものの製作に関心をもち、製作に関する基礎的・基本的な知識及び技能を身につけるとともに、作る楽しさを実感し、日常生活で活用する能力を育てることをねらいとしている<sup>4)</sup>」と記述されている。魚住・近藤(2005)<sup>5)</sup>は、小学校のものづくり学習を「ある目的の基に素材に手を加えて、形ある人工物をつくる学習」と定義し、生活科、図画工作、家庭科、理科の学習指導要領の取扱いの違いを比較した。その中で、家庭科は生活に役立つものを製作するという合目的製作活動が含まれている点が他教科の製作目的と異なることを指摘した。しかしながら、この合目的製作の学びの効果、展開方法については未だ検討の余地を残している。特に「生活に役立つ」「日常生活で活用する」ものを作る時、学習者の生活背景や思考の個性性に焦点を当てる必要がある。このような背景に鑑み、本研究では布を用いた製作の学習過程の個性性に着目した。

教育評価はその評価主体によって意義が異なるものであり、その目的や方法がより広範かつ詳細にとらえ直されようとする動きがある。その中で、現在、活動を通じた学びを学習者個々に内化させ定着をうながす教育方法として学習者による自己評価に焦点があたっている。教育評価でいう自己評価とは、「子どもたちが自分で自分の人となりや学習の状態を評価し、それによって得た情報によって自分を確認し今後の学習や行動を調整すること<sup>6)</sup>」であり、学習活動の自己制御(self-regulation)としての目的をもつ評価<sup>7)</sup>である。これらの定義を確認した上で、本研究では自己評価活動を「自身の学習過程を自己省察する認知的活動」ととらえた。

家庭科の布を用いた製作実習という学習者主体のものづくりは、その学習過程における模倣や他者との協働、および内省による学びの個性性に教育的意義が認められている<sup>8)9)</sup>。しかしながら、このような学びの個性性が重視されながらも、学習者自身が学習過程をふりかえり前後の活動を調整する自己評価活動の方法や内容を分析した研究は点在する程度である。一色(2008)<sup>10)</sup>は、『日本家庭科教育学会誌』(1960年～2008年)、『日本教科教育学会誌』(1976年～2008年)、諸大学の紀要等を対象に、製作実習の評価に関する文献を調査した。そこでは、製作技能の評価、関心・意

欲など製作意識の評価、学習者の特性評価、製作過程の変容と評価、という4つの分類視点を示した上で、学習者個々の学習過程や認知面の差異に着目した研究は少数しかみられないことを指摘した。

以上にもとづいて、本研究は家庭科における布を用いた製作における学習者の自己評価活動に着目し、意義と展望について述べることを目的とした。そのために、布を用いた製作の学習過程に着目した評価研究を概観し意義を検討すること、さらには自己評価活動の概念的枠組みを検討することにより展望を示すこととした。

## 2. 布を用いた製作における自己評価活動

### (1) 学習過程に着目した評価研究の検討

布を用いた製作の学習過程の個性性に着目した評価研究には、学習者の認知的特性および製作過程の認識変容を分析した研究等がみられた。

学習者特性を対象とした評価研究では、武藤(1985)<sup>11)</sup>の調理、被服製作技術の自己評価と認知特性との関連を分析した研究、高木(1997;1998)<sup>12)13)</sup>の「認知スタイル(熟慮傾向・衝動傾向)」「つまずいたときの対処法(独立傾向・依存傾向)」等を評価対象とした研究等がみられた。この学習者特性に関する評価研究は、教師による評価基準設定や効果的な教材開発を意図して追究するだけでなく、学習者の認知的特性の個人差を考慮し、学習過程において個々の主体的活動を支援するための評価活動として追究されていた。

製作過程の認識変容をとらえた研究では、伊波(1995)<sup>14)</sup>の製作過程のメタ認知をうながす指導実践と学習者の変容を考察した研究がみられた。評価対象を、製作過程の自己評価と布の操作状況、および知識状況とし、認知変容をうながす形成的評価としての意義や、認知面の評価基準を検討するための有効な示唆を与えていた。また、山下(2004)<sup>15)</sup>は、技能習得にかかわる形成的な評価をとり上げ、実習授業における教師の形成的評価と生徒の変容の分析という点で、先にあげた伊波の研究と類似の視点、共通の示唆が得られた。鈴木(2003)<sup>16)</sup>は、教師が直接的に学習の観点を示し自己評価をうながすのではなく、製作を通して今何を学んでいるかを探索的に考えさせる手段として自己評価を活用するという、教師のかかわり方の工夫を示した。以上3件の研究は、学習過程における思考プロセスおよびそれに対する教師の働きかけを重視した研究であり、自己評価活動の意義について示唆を与えていた。

刀祿館 (1983)<sup>17)</sup> は、B. S. ブルームらの『教育評価法ハンドブック (1971)』を参考に、製作実習の認知面に関する評価項目について検討した。学習過程が比較的長期である被服製作において、形成的評価による指導の是正が技能の習得に効果的であるとの見解から、認知領域を評価の対象にすることの必要性を述べた。製作過程で発現する学習者のつまづきに対応する即時的な形成的評価にとどまらず、目標を体系的に分類することで教師の形成的評価の基準を整理できたと考察した。さらに、技能に対する認知分類項目にそれぞれ下位分類項目を設定することで、個々の理解度を測る基準になると提案した。これにより、技能に関する個々の認知領域の到達目標を明確にして指導することが可能であると考察した。

内藤・伊藤 (2006)<sup>18)</sup> は、実習授業に関する4種の自己評価モデルを開発し、評価のあり方を追究した。その一例として、中学校のアームカバー製作全7時間のうち、ミシン縫いの工程に関して、生徒個々に1単位時間の目標をもたせ、その自己評価が記録として残るような評価表を作成していた。これは、従来、製作実習において用いられてきた形成的評価の形式を取り入れた実践であるが、さらに相互評価を加えることにより意欲を高めることができたと考察していた。これは「相互評価を取り入れたモデル」であり、他にも調理実習の「らせん型発展モデル」「ステップを取り入れたモデル」「課題解決過程の形成的評価モデル」が示されていた。4モデルいずれも、学びの個別性と共有性のバランスがとれていることが自己評価に必要な手続きモデルであると考察していた。これらのモデルは、各実習授業における学習者の認知過程を想定し、それを学習者から引き出す評価の枠組み、方法として追究されていた。

製作過程における学習者の認識の変容に着目した評価は、自己評価と教師の評価の相互作用から認知変容をとらえるといった形成的評価を意図した実践研究、および認知面の評価項目作成、自己評価と他者評価にもとづく変容等であった。いずれも、製作実習の活動性を評価に活かし、学習の差異にアプローチしようとするものであった。学習者による自己評価活動の意義を追究する上で、これらの先行研究は学習過程の個別性と主体的活動を重視するという共通した認識を示していた。さらにその学習過程で育成される能力を体系的に整理し、評価研究を位置づけていく必要もあろう。

## (2) 製作学習を通して育成する能力と自己評価活動

家庭科教育の研究では、従来、布を用いた製作学習で育成する学力を実用的技術として手指の巧緻性の発達から検討した研究が多く、学習過程の認知的側面、

思考プロセスといった学習者の自己評価から追究した研究は数件であった。また、生活を創造する能力の育成を目指す家庭科教育では、生活技術を「計画、選択、実行、運営・管理、評価と生活の営みの全過程を含むもの<sup>19)</sup>」と総合的、複合的にとらえる見解は示されているものの、その学習過程における自己評価活動の意義を追究した研究はみられない。林 (2000)<sup>20)</sup> は、Brown, M. M. (1979; 1980) の自己内省や他者との対話を通して、もの、ひと、ことにかかわる思考と行為を結びつけ、生活実践の意味をとらえ直し、自己と他者および生活世界との関係を再構成していく、という学習観によって、家庭科教育を通して育成する生活実践力を説明できると指摘した。これは、具体物を対象とする布を用いた製作において、学習者自身が学習過程を自己省察する自己評価活動の意義を示唆している。

また、家庭科教育ではものづくりを通して育成される学力、能力を追究した研究は少数であったのに対し、中学校技術・家庭科技術分野においては、ものづくりの製作過程で育成される能力、学力の構造を追究した研究がいくつかみられた。技術科教育は生活や産業を支える技術として材料と加工の学習を重視している<sup>21)</sup> 点が家庭科教育とは異なるが、ものづくりにおける学力や学習者の認知活動を追究していく上で、技術科教育の先行研究から示唆を得られると考えた。例えば、魚住・宮川 (1992)<sup>22)</sup> は、技術科教育の自己教育力を、自ら進んで工夫し創造する能力と自ら進んで実践していく態度の育成を目指すものとし、木工製作というものづくり題材を通して育成する学力、能力を追究した。自己教育力の下位に位置づく3項目と各項目の構成要素を、「実践的・体験的な問題解決学習の仕方の習得 (課題意識、主体的志向、学習の仕方、自己評価、情報の活用、基礎・基本の知識・技能)」、「実践的・体験的な学習への意欲 (集中力、計画力、自主性、達成志向、持続性、知的好奇心)」、「技術との関わりの中での生き方の探究 (体験的学習態度の育成、環境保全への理解、資源の有効利用、情報化社会への対応)」とし、多面的、多元的な学力を示した。家庭科教育も技術科教育と同様に生活に役立つものづくりを目標に掲げているが、自己評価活動を問題解決学習の仕方という認知的枠組みを育成するためのものととらえるこのような学力観が追究されているとはいえない。技術科教育の城・安東 (1992)<sup>23)</sup> は、実際の技術的問題解決では技術的能力以外に、自分の技術的知識、行為や技能を上位からコントロールする能力、すなわち自分の行為の仕方、操作の選択とその評価を監視 (モニタ) するメタ認知の能力が別に存在するとしている。このことから、技術的問題解決において、技術的能力と自

己評価能力が必要であるということを描した。さらに、Brawn, A. L (1987) を引用し、自己評価能力の認知過程は、①問題や状況はどのような構造や特徴からなるかを分析したり特徴づけたりする過程、②解決にあたって、自分は何を知らており、何を知らないかを熟考する過程、③問題や状況に対処するにあたって、プランを考察、提案する過程、④自己の行為の展開やその働きかけにともなう状況の展開をチェックしたりモニタする過程、の4要素からなると説明した。これらから、安東・城は技術科教育のものづくり学習における自己評価能力を「自分の組織した技術的活動を評価・監視する能力（認知的モニタリング能力）<sup>24)</sup>」と定義した。この定義は、本研究の「自身の学習過程を自己省察する認知的活動」としての自己評価活動のとらえ方と共通するものであった。

新しい学習指導要領では、評価について次のような記述がみられた。小学校家庭科の製作実習の取扱いにおいて、例えば「製作計画については、児童が自分の製作目的や課題を確認しながら製作を進めることができるように工夫し、製作過程で進捗の確認や評価をすることによって途中で計画を修正したり、最後まで製作する目的を意識したりして活動できるように配慮する<sup>25)</sup>」、「製作後の自己評価、相互評価により、製作物の価値や技能のふりかえりの機会をもつこと<sup>26)</sup>」と示されていた。中学校は技術・家庭科全体の内容の取扱いの中で評価について示されており、指導前後や過程における評価の重要性、生徒の自己評価や相互評価の充実、生徒個々の状況に応じた生徒理解と言葉かけの配慮等<sup>27)</sup>について記述されていた。いずれも、学習者自身の自己評価活動をうながしつつ、場面によって学習者相互の評価活動、すなわち他者評価を取り入れること、および形成的評価の必要性を示していた。

以上より、次の二つの課題を見出した。一つは自己評価活動の評価対象を検討することである。二つには、家庭科教育において、布を用いたものづくりを通して育成する能力の一つに自己評価能力を位置づけ、学習過程における自己評価活動を重視する実践を追究していくことである。ここでは学習過程の活動目的の違いに着目し、次に評価対象の検討を試みた。

### 3. 製作学習における自己評価活動の枠組みおよび操作の検討

#### (1) 学習活動の行為と操作に着目した枠組みの検討

布を用いた製作の学習過程における自己評価活動の評価対象を検討するために、学習者の一連の活動過程における素材や道具とのかかわりの特徴ごとに場面を

分類し、物的、外的活動と心的、内的活動を整理する必要があると考えた。そこで本研究では活動の水準と外的、内的側面を概念的に整理したレオンチェフの活動理論を参考に整理した。活動理論とは、「人間の生産活動に典型的に認められる外界の諸対象に対して道具を用いて働きかけをおこなう目的志向的・道具的な活動を、人間に特有な高次な意識的・社会的行動を説明するモデルと考え、それを基礎に心理学および人間諸科学の理論の再構築を標榜している理論、方法論<sup>28)</sup>」である。その方法論では、人間の活動の分析単位を、活動、行為、操作の3つの水準でとらえており、各単位で分析可能である。また、各分析単位についてレオンチェフは、活動は動機によって生じるもの、行為は活動に対する目的志向的な過程、操作は行為を実現する方法<sup>29)</sup>と定義した。

これらを参考に、布を用いた製作学習のような目的志向的・道具的な学習活動では、学習者自身の自己評価活動をいずれかの水準の内的単位と解釈することで、その内容を具体的に検討することが可能となると考えた。そこで今回は、目的志向的過程としての行為を次の3つの場面（A）製作物の構想・設計、（B）裁断、縫製、装飾、（C）製作物の検討、に区切り、これら一連の学習活動の外的活動を製作活動、内的活動を自己評価活動、各行為を実現する方法としての外的操作、内的操作を位置づけた（表1）。ここでは、外的操作に対応させて内的操作を検討することにより、自己評価活動の評価対象を決定した。なお、製作学習の中で両活動がおこなわれる動機について、製作活動は「道具を用いて素材を変化させ製作物をつくること」、自己評価活動はその「製作活動を自己省察し、適宜その活動を調整すること」と定義した。

表1 袋製作学習の活動に関する各水準

水準	外的水準	内的水準
活動	製作活動	自己評価活動
行為	(A) 製作物の構想・設計 (B) 裁断、縫製、装飾 (C) 製作物の検討	
操作	各行為に関する 外的操作	各行為に関する 内的操作

本研究では以上の学習活動の外的、内的水準の枠組みにもとづいて、操作内容を検討し、内的操作を自己評価活動の評価対象として追究した。また、操作を検討する過程において、内的操作と外的操作を対応させ

ながら決定した。それは、レオンチェフによる活動理論が外的活動と内的活動が共通の構造をもつという見方、さらに「形の上で内的な活動は、外的活動から生まれたものであり、外的な活動と無縁なものでも、その上位に位置するものでもなく、両活動は原則的に結びついており、しかも相互通行的な関連を持っている<sup>30)</sup>」という見方にもとづいている。

**(2) 各行為の外的操作と内的操作の特徴**

今回は、袋製作の学習活動を想定し、製作活動と自己評価活動について検討した(表2)。

(A) 製作物の構想・設計と(B)裁断、縫製、装飾、および(C)製作物の検討、の各行為に対する目的志向的な過程および操作の特徴について記述すると次のとおりである。(A)は製作物の用途や形態を探る行為であり、(B)は形をつくるために道具を用いて素材を変化させる行為である。さらに(C)は製作物を対象に多面的に検討する行為である、という特徴があった。(A)から(C)のように、行為の目的および対象がそれぞれ異なるため、自己評価活動としての内的操作は各段階固有のものとして整理しやすい。

(A)においては、外的操作と内的操作は相互に関連し合っている。例えば、学習過程において、「使用、製作目的を決める」ために、それが「実際に日常生活で使用可能なものであるか」を自己評価する内的操作が働く。このように、構想・設計する一連の外的操作には、ある程度限定された観点で内的操作を設定できる。

(B)においても、自身の外的操作を自己モニタする内的操作を挙げることができる。例えば、「道具の用途を理解する」という外的操作に対し、「道具を適切に用いているかどうか」を自己評価する。しかしながら、(B)では外的操作に対する内的操作のとらえ方が多様にあるため、縫製、裁断といった道具を用いた基礎的な外的行為および操作と、それに対する内的行為や操作をどのように対応させるか決定する際に学習者によって個人差が生じる。例えば、はさみを使ったり並ぬいの場合では、手指の巧緻性に対する認識の違いが多様にあることが個人差を生じさせる。それは、道具的行為の場合には外的操作は限定されているが、それに対する内的操作にはさまざまな水準が考えられることと関連している。それゆえに、道具は外的操作をあらかじめ限定したり、誘発したりするために、それに対する内的操作の検討は、慎重にする必要がある。このように、道具を用いる活動の動的側面を考慮すると、内的行為や操作の評価については観点が多元にあることが(B)の特徴であった。

一方(C)では、製作物を検討する活動を他者と共有することによって内的操作が広がるという特徴があ

**表2 袋の製作活動と学習者の自己評価活動(例)**

袋製作の学習活動		
水準	外的水準	内的水準
活動	製作活動	自己評価活動
行為	(A) 製作物の構想・設計	
操作	<ul style="list-style-type: none"> <li>・使用、製作目的を決める</li> <li>・用途を検討する</li> <li>・完成図を描く</li> <li>・形態を検討する</li> <li>・作り方を調べる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際に日常生活で使用可能なものであるか</li> <li>・完成図のできればえはどうか</li> <li>・自身の力で製作可能なものであるか</li> <li>・素材の特性を検討し、活かしているか</li> <li>・適切な道具を検討しているか</li> <li>・製作活動は得意か苦手か</li> </ul>
行為	(B) 裁断、縫製、装飾	
操作	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道具の用途を理解する</li> <li>・道具を用いる方法を確認する</li> <li>・素材の特性を理解する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道具を適切に用いているかどうか</li> <li>・道具に対する素材の特性はどうか</li> </ul>
行為	(C) 製作物の検討	
操作	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日常生活で使用してみる</li> <li>・丈夫かどうか確認する</li> <li>・目的に対応した作品かどうかを検討する</li> <li>・他者の製作物と比較する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・製作物のできればえはどうか</li> <li>・構想・設計に対して、裁断、縫製など計画を遂行できたか</li> <li>・製作過程は製作技術に合っていたか</li> <li>・他者の製作物と自身の製作物のできればえ等、それぞれの違いは何か</li> </ul>

る。また、製作活動としての外的操作は、「丈夫かどうか確認する」「他者の製作物と比較する」といった内容であり、それらを自己評価する、という展開になる。すなわち、(A)と(B)は構想や設計、製作行為などの外的操作に対する自己評価活動がおこなわれるのに対して、(C)はすでに完成した製作物や使用に対する内的操作が自己評価活動となる点が特徴であった。すなわち(C)は、(A)や(B)の手順や質をふりかえる内的操作と完成品としての製作物を検討する内的操作の両面があることが特徴であった。

各場面の自己評価活動には以上のような内容の違いがみられたが、それを学習者自身がモニタし、コントロールする学習過程の抽出方法については検討の余地を残す。例えば各行為において、(A)や(C)の外的操作はあらかじめ列挙しやすく、それに対応した内的操作を自己評価の対象として事前にしぼりやすいこと。対して(B)では、道具の使用が加わることで、その外的操作性の質が異なるため、学習過程に生じる自己評価の対象が多元になることがあげられる。各場面の学習者による自己評価活動は同様に重要であるが、その評価対象を教師が示す教育評価にはさらなるアプローチが必要である。

#### 4. まとめ

本研究では家庭科の布を用いた製作の学習過程における学習者の自己評価活動を取り上げ、その意義と展望を追究した。

製作学習の学習過程に着目した評価研究では、自己評価の展開方法とその学びを追究し、学習者自身が学習過程を自己省察する認知的活動が学習の個別性を支えていることを指摘していた。さらに自己評価活動によって家庭科における製作学習の意義を追究できるものであるとされていた。今後、家庭科教育において製作を通して育成する能力、学力の一つとして自己評価能力を位置づけ、そのための自己評価活動のあり方を検討することが求められる。

さらに本研究では、学習者が自己評価活動を効果的におこなうために、そのとらえ方と概念的枠組みを提示した。家庭科の布を用いた製作の学習活動は、外的な製作活動と内的な自己評価活動からなると考えた。また、活動目的の違いからその過程を行為3場面(製作物の構想・設計、裁断・縫製・装飾、製作物の検討)に区切り、各行為に関する外的操作および内的操作を検討した。「目的に準拠した評価」と「個人内評価」の結合が重視される<sup>31)</sup> 現在の教育評価においては、学習者自身の評価活動から教師による評価活動を再検討する必要がある。各場面の行為は、いずれも教師の題材、ねらいの設定によって変化するものであり、育成される自己評価能力も異なるものである。今回のように活動水準の概念的枠組みにもとづいて製作学習の内的操作を自己評価活動の内容として示したことは、学習者の主体形成をうながす具体的方策を提案するだけでなく、教師による形成的評価の方法にも示唆を与えるものではないかと考える。

今後、家庭科の布を用いた製作活動における自己評価活動の教育的意義をさらに検討するとともに、学習

者自身に内的操作を能動的に意識化させる方略を追究したい。

#### 【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省 (2008). 『小学校学習指導要領解説 家庭編 (平成20年8月)』, 東洋館出版社, 44.
- 2) 文部科学省 (2008). 『中学校学習指導要領解説 技術・家庭編 (平成20年9月)』, 教育図書, 63.
- 3) 文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 (2007). 教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ (平成19年11月7日) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/001/07110606/001.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/001/07110606/001.pdf), 67.
- 4) 前掲1), 44.
- 5) 魚住明生・近藤恭子 (2005). 「小学校におけるものづくり学習に関する基礎的研究—学習指導要領解説書と教科書の調査を基にして—」, 富山大学教育実践総合センター紀要6, 83-91.
- 6) 田中耕治 (2008). 「第Ⅱ部 教育評価の機能と方法 第4章 教育実践と教育評価の役割」, 『岩波テキストブック 教育評価』, 岩波書店, 125.
- 7) 遠藤由美 (2006). 「自己と評価」, 辰野千壽・石田恒好・北尾倫彦監修, 『教育評価事典』, 図書文化社, 55.
- 8) 福田公子 (2005). 「第7章 生活実践と家庭科の内容—生涯発達と自己形成—」, 多々納道子・福田公子編著, 『教育実践力をつける家庭科教育法』, 大学教育出版, 82-83.
- 9) 武藤八恵子 (1998). 「第3章 家庭科教育の目標を再考する」『家庭科教育再考』, 家政教育社, 85-94.
- 10) 一色玲子 (2008). 「家庭科の製作実習に関する評価研究の動向と展望—一つの学びを支える評価法の検討に向けて—」, 教育学研究紀要 (CD-ROM版) 54, 中国四国教育学会, 185-190.
- 11) 武藤八恵子 (1985). 「技術評価に及ぼす先行経験と性格」, 日本家庭科教育学会誌28(2), 32-38.
- 12) 高木幸子 (1997). 「被服領域における生徒の学習スタイルに対応した教材の開発」, 日本教材学会年報8, 37-39.
- 13) 高木幸子 (1998). 「被服領域における生徒の学習スタイルに対応した教材の開発 (2)」, 日本教材学会年報9, 121-123.
- 14) 伊波富久美 (1995). 「家庭科教育における学習者の学び (第3報) 手続きの意味を問う被服製作学習の試み」, 日本家庭科教育学会誌38(1), 75-78.
- 15) 山下智恵子 (2004). 「被服製作」授業における

家庭科における布を用いた製作の自己評価活動の意義と展望  
—学習過程に着目した評価研究の検討をふまえて—

- 学習 (3) K子の学習活動との関連でとらえた教師の教授活動」, 香川大学教育学部研究報告第2部51(4), 7-14.
- 16) 鈴木明子 (2003). 「被服製作実習における授業プロンプトの有効性の検討—浴衣製作実習における学生の記述分析を通して—」, 日本教科教育学会誌26(3), 33-34.
- 17) 刀祢館尚子 (1983). 「形成的評価のための目標分類の試み—被服製作に関する技能の習得を中心として—」, 日本家庭科教育学会誌26(1), 62-69.
- 18) 内藤利枝子・伊藤葉子 (2006). 「家庭科の授業からみる自己評価の教育的効果」, 千葉大学教育学部研究紀要54, 127-133.
- 19) 日本家庭科教育学会 (1985). 『現代の子どもたちは家庭生活で何ができるか』, 家政教育社, 19.
- 20) 林未和子 (2004). 「第Ⅱ部 これからの家庭科への提案 第5章 生活実践知形成をめざす家庭科カリキュラム」, 福田公子・山下智恵子・林未和子編著, 『生活実践と結ぶ家庭科教育の発展』, 大学教育出版, 82-107.
- 21) 前掲2), 16-22.
- 22) 魚住明生・宮川英俊 (1992). 「技術科教育における自己教育力の育成に関する研究—自己教育力診断テストの作成—」, 日本産業教育学会誌34(4), 237-243.
- 23) 城仁士・安東茂樹 (1992). 「自己評価能力の構造とその発達」, 日本産業技術教育学会誌34(1), 7-14.
- 24) 安東茂樹・城仁士 (1994). 「技術的能力に関する研究—授業過程における自己評価能力の変化」, 日本産業技術教育学会誌36(3), 1-7.
- 25) 前掲1), 46.
- 26) 前掲1), 47.
- 27) 前掲2), 78-79.
- 28) 天野清 (1994). 「第1章 発達研究の現在—Activity theory (活動理論) の発展と現状—」, 『児童心理学』, 金子書房, 1-32.
- 29) ア・エヌ・レオンチェフ (1975), 西村学・黒田直実訳 (1981). 『活動と意識と人格』, 明治図書出版株式会社, 83-89.
- 30) 前掲29), 83.
- 31) 前掲6), 93.